

第7次松山市総合計画

基本構想・基本計画

令和7(2025) ▶ 令和16(2034)年度

松山市

令和7(2025)年3月

目次

第1章 はじめに	2
1. 総合計画について	2
① 目的	2
② 構成・期間.....	2
2. 松山市について	3
① 松山市のあゆみ.....	3
② 松山市の地域特性.....	4
③ 時代の潮流と松山市に求められるもの	6
④ 松山市の人口の推移と今後の見通し	9
⑤ みんなが描いた理想の松山市.....	10
第2章 基本構想	14
1. これからのまちづくりに向けて	14
2. 将来のまちの姿	16
① 「人」がつながる.....	18
② 「まち」がつながる.....	19
③ 「仕事」がつながる.....	20
3. 総合計画の進行管理	21
第3章 前期基本計画.....	24
1. 総論	24
① 基本計画とは.....	24
② 基本計画の期間.....	24
③ 人口減少対策について.....	24
④ 人口の将来展望について.....	25
2. 各論（政策別の未来像と取組）	29
① 政策別未来像の実現に向けて.....	29
② 政策・施策体系.....	29
③ 各政策に関連する主なSDGsの17の目標一覧	78
資料編	82
指標一覧	82
策定体制	94
関係条例等	107
分野別個別計画一覧.....	110
用語集	117

第1章

はじめに



第1章 はじめに

1. 総合計画について

① 目的

「松山市総合計画」は、松山市の将来のあるべき姿を描き、その実現を目指すために、まちづくりの方向性を示す本市の最上位計画です。

人口減少社会を迎える中、その進行を緩やかにし、状況の変化に適応しながら、市民、特に次代を担う若者や、市外や海外の在住者・企業からも選ばれ、松山市が住み続けられるまち、住み続けたいまちとして、魅力を高め発展していくことが求められます。

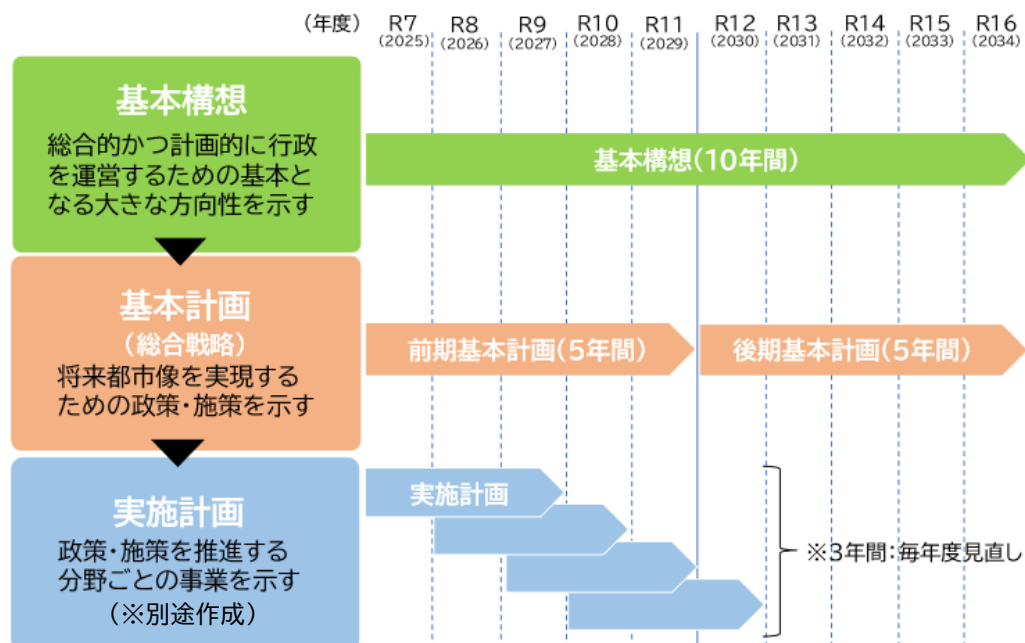
また、新型コロナウイルス感染症の拡大等をきっかけにデジタル技術の活用が広がり、人々のライフスタイルや価値観の多様化が更に進むなど、社会環境がめまぐるしく変化するこのような時代だからこそ、従来の考え方や手法にとらわれることなく夢のある未来を描き、市民や事業者、行政など、まちづくりに関わるあらゆる主体が一体となり、理想の姿の実現に向け取組を着実に進めていくことが大切です。

この計画は、多くの市民の皆さんの意見を反映した“あなた”自身の計画でもあります。一人ひとりが、できること、やりたいことに思う存分力を発揮し、人とまちが輝き、夢を実現できる未来の松山につなぐため、新たなまちづくりの指針として「第7次松山市総合計画」を策定します。

なお、これまで人口減少対策の基本的計画として別に策定していた「松山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下、「総合戦略」という）を、松山市総合計画に統合し、一体的に取組を進めていきます。

② 構成・期間

総合計画は、「基本構想」、「基本計画」、「実施計画」の3層で構成されます。計画の期間は、令和7（2025）年度から令和16（2034）年度までの10年間とします。



2. 松山市について

① 松山市のあゆみ

時代	年代	できごと
明治	1871 (4)	廃藩置県で松山藩は松山県に
	1873 (6)	愛媛県が誕生。松山に県庁を置く
	1889 (22)	市制施行で松山市が誕生。全国で 39 番目の市。人口 3 万 2,916 人
	1894 (27)	道後温泉本館改築、落成
	1895 (28)	正岡子規が療養のため帰省し、愚陀佛庵で夏目漱石と同居 (52 日間)
	1905 (38)	伊予鉄道、松山－高浜間全通 (翌年、高浜港開港)
	1906 (39)	夏目漱石の小説『坊っちゃん』が雑誌『ホトトギス』の 附録として発表
大正	1925 (14)	松山商業学校、第 2 回選抜中等学校野球大会 (甲子園) で 初の全国優勝
昭和	1937 (12)	市庁舎、二番町に完成
	1945 (20)	第 2 次世界大戦により戦災を受ける (B-29 約 60 機が爆撃)
	1951 (26)	住民投票で過半数の賛意を得た「松山国際観光温泉文化都市建設 法」が公布され、国際的な水準の観光都市づくり開始
	1952 (27)	松山城、国の史跡に指定
	1953 (28)	第 8 回国民体育大会開催
	1955 (30)	松山城に市営ロープウェイが開通
	1968 (43)	松山城長者ヶ平に第 1 号俳句ポスト設置
	1974 (49)	新市庁舎 (現本館) 完成
	1980 (55)	四国初の 40 万都市に
	1981 (56)	子規記念博物館開館、アメリカのサクラメント市と姉妹都市提携調印
	1989 (元)	ドイツのフライブルク市と姉妹都市提携調印
平成	1994 (6)	道後温泉本館、国の重要文化財に指定
	2000 (12)	中核市へ移行、堀之内にあった市営球場が移転し 「坊っちゃんスタジアム」落成
	2004 (16)	韓国の平澤市と友好都市提携調印
	2005 (17)	松山市に北条市・中島町が合併 (四国初の 50 万都市に)
	2007 (19)	坂の上の雲ミュージアム開館
	2009 (21)	スペシャルドラマ「坂の上の雲」放送開始
	2013 (25)	「環境モデル都市」に選定
	2014 (26)	台湾の台北市と友好交流協定調印
	2017 (29)	第 72 回国民体育大会・第 17 回全国障害者スポーツ大会開催、 道後温泉別館 飛鳥乃湯泉オープン
令和	2020 (2)	「SDGs 未来都市」「自治体 SDGs モデル事業」に選定
	2024 (6)	道後温泉本館が保存修理工事 (2019 (平成 31) ～) を完了し、 全館営業再開

② 松山市の地域特性

●地勢・気候

松山市は、瀬戸内海に浮かぶ有人9島など大小の島々で構成される忽那諸島^{くつなしよとう}から、高縄山系の裾野を経て、重信川と石手川により形成された松山平野へと広がっています。年中温暖な瀬戸内気候であり、年間日照時間は全国平均を大きく上回り、年間の降水量は少なめで、積雪もごく少量、台風の通過も少なく、穏やかで恵まれた気候条件です。

●コンパクトシティ

陸の玄関口であるJR松山駅や松山市駅のほか、主要な幹線道路と松山インターチェンジを結ぶ外環状道路などの整備が進み、市民や観光客の移動手段として、自家用車はもちろん、バスや路面電車など公共交通機関の利便性も高くなっています。また、乗降客が中四国最多の松山空港、フェリーなどが発着する港を有するほか、官公庁やビジネス街、大学や主要な医療機関など、暮らしに欠かせない施設が自転車や徒歩で移動できる範囲に集まるなど、陸・海・空の交通結節点と生活圏・観光地が近く、利便性の高いコンパクトなまちを形成しています。

●道後温泉

約3000年の歴史を誇り、日本最古の温泉といわれる道後温泉は、伊予国風土記^{いよのくにふどき}逸文^{ぶん}や古事記、日本書紀にも登場し、その象徴である「道後温泉本館」は、1994(平成6)年に、公衆浴場としては初めて国の重要文化財に指定されました。また、椿をシンボルとして地元民から親しまれる「椿の湯」、飛鳥時代の建築様式を取り入れ、愛媛の伝統工芸と最先端のアート作品で演出された「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉」を含む3つの外湯では、道後の湯を源泉かけ流しで満喫できます。

●松山城

市内中心部に位置する標高132mの勝山山頂にある松山城は、関ヶ原の戦いで武功を挙げた加藤嘉明が1602(慶長7)年に築城を開始しました。江戸時代までに建てられた「現存12天守」の一つを有する名城で、市街地に映える緑に囲まれた一帯から、その歴史が感じられます。また、天守のみならず、石垣や門、櫓、塀などにも多くの見どころがあり、徒歩やロープウェイ、リフトを使って登った天守の最上階からは松山平野や瀬戸内海の絶景を見渡すことができます。

●ことば文化

夏目漱石の『坊っちゃん』、司馬遼太郎の『坂の上の雲』の舞台になるなど、文学的土壌が豊かで、俳句や短歌を革新した正岡子規をはじめ、あまたの俳人が生まれました。偉大な先人たちの魂は、今でも脈々と受け継がれ、市内に点在する句碑や俳句ポスト、「俳句甲子園」、「坊っちゃん文学賞」など、「ことばのちから」をいかしたまちづくりにつながっています。

●スポーツ

プロ野球公式戦も開催される坊っちゃんスタジアム、天然芝グラウンドの陸上競技場や人工芝の球技場などを備えた北条スポーツセンター、プロバスケットボールリーグも開催される総合コミュニティセンターなど、誰もがスポーツを楽しめる環境が整っています。また、夏には離島の中島で「トライアスロン中島大会」が、冬には市内中心部を走る「愛媛マラソン」が開催され、松山ならではの「お接待の心」で、温かい応援やおもてなし、参加者と地域の人々との交流が行われています。

③ 時代の潮流と松山市に求められるもの

1) 人口減少・少子高齢化の加速

我が国の少子高齢化は、団塊の世代及び団塊ジュニア世代の高齢化に加え、東京一極集中と言われる地方からの若年層の流出や、未婚化・晩婚化・晩産化などによる少子化で、更に加速する見込みであり、生産年齢人口の減少に伴う経済活動・地域活動の低迷や担い手不足、社会保障費の増大などの問題が表面化しています。

松山市でも全国の地方都市と同様に、若い世代、中でも若年女性の転出超過が続いていることから、少子化の進行による経済活動の縮小や各分野での担い手不足が懸念されており、生産年齢人口の定着促進や女性活躍推進はもちろん、アクティブシニアの活用や時代のニーズを捉えたスタートアップの更なる支援、ビジネス分野のエコシステムの構築等が求められています。

人口減少・少子高齢化への対応は、長期的に継続して取り組むことが必要とされ、地域への愛着の醸成や、出会い・結婚・出産を望む市民が抱える不安の解消を通じて、進行を緩やかにするとともに、人口構成の若返りを図り、誰もが安心して暮らせる持続可能なまちづくりを進めていくことが求められます。

2) デジタル化の進展

近年、我が国では、デジタルの力で地方が抱える課題を解決し、すべての人が心豊かに暮らせることを目指しています。

松山市でも、各種手続きのオンライン化のほか、企業や地域コミュニティのデジタル化支援、デジタルデバイド対策、AIや自動運転などの新たな技術の実証・導入などを進めています。

また、コロナ禍等を経て、テレワークやオンライン会議のほか、オンライン申請やキャッシュレス決済も普及するなど、公共交通や観光、介護、教育など、様々な分野でデジタル技術が欠かせないものになっています。

今後は、人口減少社会に適応しながら誰もが便利で快適に暮らせる社会を実現するため、行政事務の効率化や手続きのオンライン化、学校に配備した1人1台端末(タブレット)等を用いた教育の充実、民間企業の生産性向上やサービスの高度化支援を通じた地域経済の活性化、情報系学部・コースが新設される市内大学や企業と連携したデジタル人材の育成・定着など、デジタル化を推進する取組が求められます。

3) グローバル社会への対応

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う世界的な物流の混乱や訪日外国人旅行者の大幅な減少により、観光関連産業は大きな打撃を受けたものの、コロナ禍前の水準まで回復しており、今後は、外国人旅行者が快適に移動し滞在できるような環境整備などが求められています。

松山市にとって観光関連産業は基幹産業の一つであり、中四国の空港で最多の乗降客数を誇る松山空港には国際線が多数就航しています。今後、海外も含め、旅行者から継続的に選ばれるためには、移動・買い物の利便性の向上や安全・安心の確保はもちろん、歴史・文化・自然等を活用した多様な体験型メニューの造成やDX(デジタル・トランスフォーメーション)・GX(グリーン・トランスフォーメーション)などの新しい価値観に基づくニーズに対応しながら、

松山ならではの魅力の発信に取り組む必要があります。さらに、観光以外の産業でも、海外とのつながりをいかした新たな市場の開拓が求められます。

また、経済のグローバル化や労働力人口の減少を背景として、日本で就労する外国人が増加傾向にあるため、松山市でも、新たな担い手としての受け入れに向け、就労環境の整備や異なる文化の理解促進など、多様な背景を持った外国人が安心して暮らせる環境づくりが求められます。

4) 持続可能な地球環境の実現

近年、国連の条約締約国会議では、自然と生物多様性の回復や自然との共生社会の実現、化石燃料からの脱却などが協議され、日本を含む各国に承認されています。

国内でも、都心でありながら大規模な緑地を確保し、街区で使われる電気はすべて再生可能エネルギーという大規模開発が行われるなど、環境に配慮したまちづくりがますます進んでいます。

松山市も環境モデル都市として、太陽光を中心とした再生可能エネルギーの普及や近年続いている気温上昇への適応に取り組むほか、現在整備中のJR松山駅周辺のデザインコンセプトでは、「緑の連続性の創出」を掲げ、県都の玄関口として自然と都市が調和した高質な空間づくりを進めています。

持続可能な地球環境を次世代に受け継いでいくため、今後も、ネイチャーポジティブの考え方を取り入れた自然との共生をはじめ、脱炭素社会の実現や資源の再利用・再生により環境負荷を低減する循環型社会の構築をさらに進めることが求められます。

5) 大規模自然災害への対応

近年、日本各地で気候変動が一因と考えられる異常気象が頻発し、豪雨による土砂災害など災害の激甚化が進んでいます。また、南海トラフ巨大地震や首都直下地震の発生も懸念されており、平常時から国と自治体が住民と協力し、地域の防災力を高めておくことが重要になっています。

松山市では、自主防災組織の育成や防災研修の開催、小学生から高齢者まで切れ目なく防災リーダーを育成する「全世代型防災教育」などを進めています。

また、災害時に市民生活に大きな影響を与える道路橋梁や上下水道施設など、インフラの耐震化等も計画的に進めています。

いつ起こるかわからない災害に備え、今後も地域全体の防災力の充実強化を図り、誰もが安心して過ごせるまちづくりを進めていくことが求められます。

6) 多様性(ダイバーシティ)等の尊重

近年、国内の行政や企業でも、多様性(ダイバーシティ)や公平性(エクイティ)、包括性(インクルージョン)を尊重する取組が進んでいます。

一方、職場や地域などでは、性別による役割分担意識や性的マイノリティへの偏見、国籍等による人権侵害が依然としてみられ、権利保護や多文化共生に向けた取組の重要性が指摘されています。また、無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)の払拭も求められます。

松山市では、すべての人が性別や年齢、国籍、障がいの有無などにかかわらず、個人として尊重され、自らの意思により、その個性と能力を十分に発揮することのできる社会の実現に向けた取組を進めています。

みんなが暮らしやすい社会を形成するためには、行政だけでなく、社会のあらゆる場で互いを認め合う意識を醸成することが求められます。

7) 多様な担い手・手法による協働

地方では人口減少や若者の域外流出が大きな課題となっている一方、コロナ禍をきっかけに、テレワークや二拠点居住といった新たな働き方や暮らし方が広がり、若者を中心に「田園回帰」と呼ばれる農山漁村地域への移住やその地域への関わりを持ちたいと思う人が増えています。

人々のライフスタイルや価値観が多様化したことから、従来の、地域住民や地縁組織、地元企業やNPOなど多様な主体が参画する連携したまちづくりに、他地域から様々な形で関わる「関係人口」も取り込みながら、新たなまちづくりの形をつくり上げていくことが期待されています。

松山市でも、移住相談窓口の首都圏への設置や移住ウェブサイトの整備、お試し移住の支援など移住施策を進めています。

今後は、それらに加え、地域固有の状況や課題を踏まえて、移住者や関係人口も含めた市内外の人材が多様な形で地域社会に参画する土壌形成や仕組みづくりが求められます。

8) ウェルビーイングの実現

肉体的にも精神的にも健康で、社会的にも満たされた状態である「ウェルビーイング」が近年注目されています。

中でも、若者から高齢者まで、誰もが、健康で心豊かに暮らし、自然と身近に接することができる生活環境等をつくり、やりがいを持って多様な活動ができる地域社会を実現するため、SDGsの各ゴール達成に向けた取組が求められています。

松山市では、SDGs未来都市として、産・学・民・官・金が連携するプラットフォームや産学官連携窓口「まつやま未来パレット」を設置し、官民協働で誰もが生きがいを持って暮らせるまちづくりを進めています。

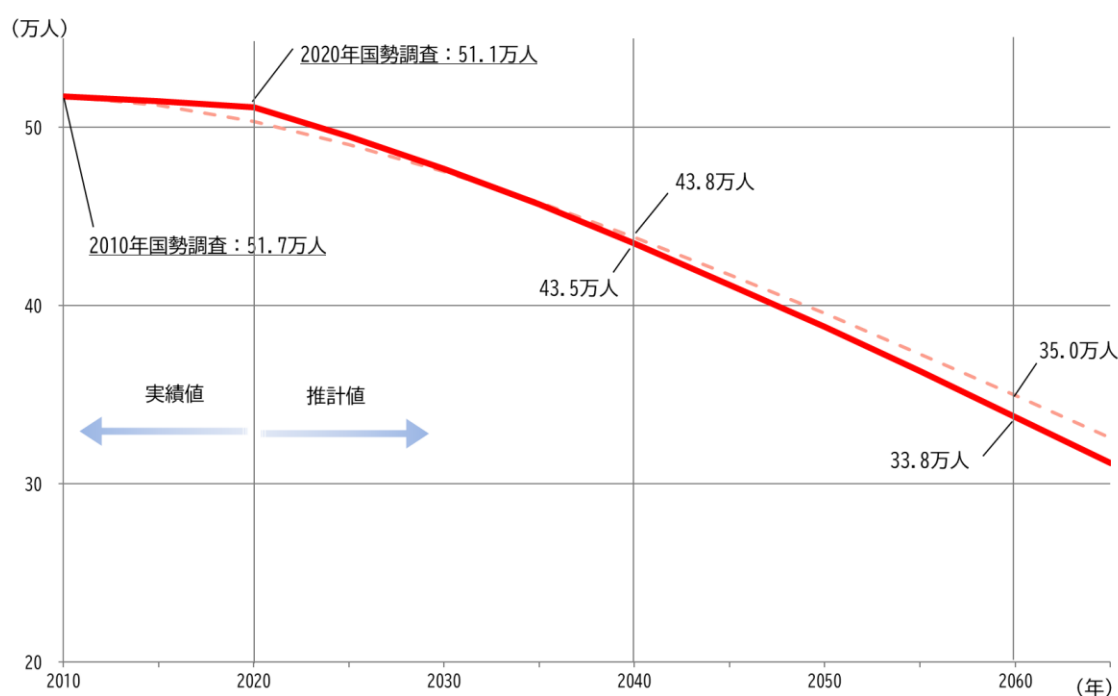
今後は、ウェルビーイングの実現に向け、様々な交流・連携・協働ができる場や、住民が主体となって多様なステークホルダーとともに地域課題を解決できる場、「リカレント教育」、「リスキリング」といった学び直しができる場をつくり、そこに参画する機会を創出することが求められます。

④ 松山市の人口の推移と今後の見通し

国勢調査による松山市の2020年の人口は51.1万人で、2010年の51.7万人からは減少しているものの、「松山創生人口100年ビジョン」策定時（2016年）の推計値（グラフ点線）を上回る結果となっています。

一方で、2020年の国勢調査結果に、直近の合計特殊出生率や社会移動の影響などを反映した推計（グラフ実線）では、2040年には43.5万人、2060年には33.8万人に減少し、人口ビジョン策定時の想定よりも、人口減少が加速することが予測されています。

松山市の人口の推移と今後の見通し



赤色点線：点線は2016年1月策定「松山創生人口100年ビジョン」の推計値

【-----】 国立社会保障・人口問題研究所の推計手法に準拠した推計値
※基準値は2010年国勢調査51.7万人

赤色実線：今回新たに以下の条件で算出した推計値（現状ベース）

【—————】 「地方版総合戦略の策定等に向けた人口動向分析・将来人口推計の手引き（令和6年6月版）」を踏まえた松山市独自の推計値
・合計特殊出生率が「人口動態統計」（松山市保健所）の2018年から2022年の平均値
・純移動率が2021年10月1日時点と2023年10月1日時点の住民基本台帳登録者数から算出した値
※基準値は2020年国勢調査51.1万人

⑤ みんなが描いた理想の松山市

10,000人が描いた理想の松山市

市民や松山市にゆかりのある県外住者を対象にしたアンケート、学生や若手社会人を対象にしたワークショップを通じて、皆さんに「理想の松山市」を描いていただきました。

たくさんいただいたメッセージのごく一部ですが、ここでご紹介します。



それぞれの世代や立場で描かれる理想の未来には、家族や友人などの身近な存在はもちろん、観光客や趣味・イベントなどを通じて出会った多様な人々とのつながり、歴史や文化、自然といった時間を超えたつながり、市内のまちとまち、松山と全国のまち、海外といった地域間のつながりなど、交流、共生、継承といった「つながり」を大切にしたまちが描かれていました。



